

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792591

研究課題名(和文) 終末期がん患者の「家族への負担感」の概念化と尺度開発

研究課題名(英文) self-perceived burden in terminally ill cancer patients: conceptualization and scale development

研究代表者

大えき 美樹(OEKI, MIKI)

広島大学・医歯薬保健学研究院・講師

研究者番号：70403392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、終末期がん患者の家族への負担感を測定する尺度を開発することを目的とした。家族への負担感の概念の明確化、アイテムプールの作成、表面的妥当性および内容的妥当性の検討を行い10項目から構成された家族への負担感尺度を作成した。今後、信頼性・妥当性の検討を十分に行っていく必要があるものの、看護実践において意義が高い尺度が作成された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a scale for self-perceived burden in terminally ill cancer patients. Clarifying the concept of self-perceived burden, developing item pool, and examining the face validity and concept validity, the scale for self-perceived burden in terminally ill cancer patients was developed. The scale for self-perceived burden in terminally ill cancer patients is significant and practically feasible even through its applicability and validity need to be further confirmed.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：終末期がん患者 家族への負担感 self-perceived burden 尺度開発 在宅看護 終末期看護

1. 研究開始当初の背景

高齢化率の上昇に伴い、がん患者数の増加が予測されている。そうした中、医療費増大の対策による在宅医療推進の動向や終末期がん患者の QOL の観点から、終末期がん患者の意向に沿った療養場所の選択として在宅医療の充実が求められている。また、望んだ場所で療養し亡くなることは、望ましい死の要素のひとつであるとされている。しかし、国民の意識調査において、最期まで自宅で療養することを望んでいるが、希望を実現させていくことを阻む理由の一つとして「家族に負担をかける」といった理由があげられている。

こうした家族から介護を受けることに対して被介護者が抱く否定的な感情は Self-perceived burden (以下、SPB とする) とされ、被介護者の精神的健康の悪化や QOL の低下を招いているとされている。したがって被介護者の精神的健康の維持・向上において SPB に着目し、SPB の軽減に向けた支援をすることが重要となる。しかし、我が国において介護を受ける側の負担感についての研究は非常に少なく、十分な関心が払われているとは言い難い。SPB を評価する尺度として、信頼性・妥当性が検証されたものは唯一、Self-perceived burden scale (以下、SPBS とする) が発表されている。この尺度は、透析患者を対象に欧米で開発され、SPBS 日本語版も作成されている。しかし、SPBS の項目には終末期がん患者が体験しているがんに関連した思いなど具体的な項目はなく、がんに関連した家族への負担感の内容や程度を評価することはできない。

我が国の自宅でのがん患者死亡率は 7% と低く、人口構成の高齢化と核家族化、地域連帯意識の希薄化が指摘される中で家族による介護状況はますます厳しさを増す。終末期がん患者が抱く SPB について具体的に評価することは、患者のニーズに応じたケアの提供につながり、スムーズな在宅移行および在宅療養の QOL 維持向上に向けた看護実践への示唆を得ると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、終末期がん患者の家族への負担感の概念の明確化および家族への負担感尺度の開発を行うことである。

3. 研究の方法

(1) 半構成的面接

家族介護者から介護を受けた経験がある終末期がん患者 15 名を対象に半構成的面接を実施した。家族から介護を受けることに対してどのように感じていたか、家族から介護を受けることに対して負担に感じた時の経験などインタビューガイドに沿って実施した。インタビュー内容は、許可を得て録音した。インタビュー内容は逐語録に起こし、家族への負担感に焦点を当て、質的統合法(KJ

法)を用いて分析した。

(2) 質問紙調査

家族介護者から介護を受けた経験がある終末期がん患者 100 名を対象に質問紙調査を実施した。

質問項目は、家族への負担感尺度 10 項目、SPBS 日本語版 9 項目、The general health questionnaire(以下、GHQ とする)12 項目、患者および主介護者の基本情報、患者の身体状況、介護状況の 18 項目とした。

分析は、家族への負担感尺度の信頼性の検討として、クロンバック 係数を算出し、内的整合性の検討を行った。家族への負担感尺度の基準関連妥当性の検討として、SPBS を用いた同時的妥当性を検討した。また、因子分析を用いて構成概念妥当性の検討を行った。すべての分析には統計パッケージ PASW Statistics 18 (SPSS inc, 東京)を用いた。

倫理的配慮として、研究の目的、参加は自由意思であること、参加の有無によって不利益を受けないこと、個人は特定されないことなどを説明文書を用いて口頭で説明した。面接への同意は、文書にて同意を得た。質問紙調査への同意は、郵送法にて回収、同意とした。本研究は、所属大学の医学部倫理審査委員会の承認を得るとともに、各施設において独自に行われている倫理審査の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) SPB に関する概念の検討

国内外における SPB に関連する文献検討の結果、我が国において SPB は QOL やスピリチュアリティに関連する要因として扱われ、SPB に焦点が当てられた報告は少なかった。

一方、国外では、終末期患者の多くが SPB を抱き、SPB と QOL や抑うつ、希死念慮との関連が報告され、SPB を軽減させる支援の重要性が述べられていた。また SPB は、自らの疾病や介護の必要が他人の生活に影響を及ぼすことにより生じる気遣いであり、罪責感、苦悩、自己肯定感の低下などにつながると定義されていることが明らかとなった。

さらに、SPB は、がん患者のほか、筋萎縮性側索硬化症 (ALS)、脳卒中、慢性的な疼痛のある患者においても注目すべき問題として扱われていた。

(2) アイテムプールの作成と表面的妥当性および内容的妥当性の検討

終末期がん患者 15 名を対象とした半構成的面接を実施し、質的統合法(KJ法)を用いて分析し、アイテムプールを抽出した。

対象者について、性別は、男性が 6 名、女性が 9 名であった。年代は、40 歳代が 1 名、60 歳代が 5 名、70 歳代が 4 名、80 歳代が 5 名であった。疾患部位は、大腸が 5 名、乳が 2 名、肺が 2 名であり、骨、前立腺、肝、食道、卵巣が各 1 名ずつであった。がん患者の

身体的な活動の程度を示す performance status (以下, PS とする) は, PS2 が 2 名, PS3 が 12 名, PS4 が 1 名であった。PS0 と PS1 はいなかった。主介護者について, 性別は, 男性が 9 名, 女性が 6 名であった。続柄は配偶者が 10 名, 子どもが 4 名, 親が 1 名であった。主介護者の年代は, 30 歳代が 2 名, 40 歳代が 1 名, 50 歳代が 1 名, 60 歳代が 4 名, 70 歳代が 5 名, 80 歳代が 2 名であった。

逐語録より 85 枚のラベルが作成され, 多段ピックアップ法により 6 段目までグループ編成し, 10 枚を最終ラベルとした。

がん専門看護師, 緩和ケア認定看護師, 看護学教員による表面的妥当性および内容的妥当性の検討を行い, 以下の 10 項目から構成される「家族への負担感尺度」を作成した。

<私の世話が大変なので家族が体調を崩してしまうのではないかと心配になる>, <私の世話が大変なので家族にストレスをあたえているのではないかと心配になる>, <家族の一員としての役割が果たせないのて心苦しい>, <家族に経済的な負担をかけているので心苦しい>, <家族には家事や仕事があるので甘えてはいけないと思う>, <家族に恩返しできないのは心苦しい>, <私の体調が悪い時には家族が予定を変更しなければならぬので心苦しい>, <家族につらくあたることがあって申し訳ない>, <家族に苦しんでいる姿を見せて申し訳ない>, <これから先, 思うように動けなくなったとき家族に迷惑をかけるのではないかと心配になる>。

10 枚の最終ラベルの関係性に注目すると, 終末期がん患者の家族への負担感, 家族が体調を崩してしまうのではないかと, 家族の一員として役割が果たせない, つらくあたることや苦しんでいる姿を見せて申し訳ないとした辛苦や心配, 申し訳なさが基盤にあった。そして, 自分の世話が家族にストレスをあたえているのではないかとという心配を生じていた。また, これから先, 思うように動けなくなったときに家族に迷惑をかけるのではないかと, 家族に恩返しができないとした将来に対する辛苦や心配とも関係していた。これらの辛苦や心配があいまった結果, 家族には甘えてはいけないという思いを生じていた。

家族介護者から介護を受けている終末期がん患者は, 自分の世話が家族の健康や生活の営みに対して負の影響を与えていると感じ負担感を抱いていた。また, 対象者は終末期状態であり, 病状が進行性に悪化する状況の中で, 今後さらに介護の必要性が高くなること, 家族に恩返しできずに亡くなってしまふことを慮り, 将来に対する辛苦や心配を含んでいた。そして, 辛苦や心配があいまって家族には甘えてはいけないと感じていることが明らかとなった。介護者に負担をかけていると感じている者は, 介護者の負担を軽減するために自分のニーズを隠すことが報告されている(Mcpherson, 2007)。家族からの被介護体験に対して, 終末期がん患者が家族へ

の負担感を抱くことにより介護者に自分のニーズを隠し, 必要な支援を受けられない可能性を示唆した。

(3) 家族への負担感尺度の信頼性・妥当性の検討

終末期がん患者を対象に「家族への負担感」尺度を含む質問紙調査を実施し, 統計学的手法による信頼性・妥当性の検討を進めている。更なる信頼性・妥当性の検討は必要であるものの, 終末期がん患者を対象に作成された SPB の評価尺度が存在しなかったことを鑑みると, 本研究で行った尺度開発は看護実践に意義が高いと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. 大塚美樹, 外来通院がん患者の spirituality に注目した QOL に影響する要因, ホスピスケアと在宅ケア, 21 巻, 査読有, 2013, pp310-313

2. Miki Oeki, Tamiko Mogami, Hiroshi Hagino, Self-perceived burden in patients with cancer: scale development and descriptive study, European Journal of Oncology Nursing, 16 巻, 査読有, 2012, 145-152

3. 大塚美樹, 安部睦美, 萩野浩, 進行がん患者の家族への負担感に関連する要因, 米子医学雑誌, 63 巻, 査読有, 2012, pp67-72

〔学会発表〕(計 7 件)

1. 大塚美樹, 佐々木由紀, 終末期がん患者の被介護体験における否定的な受けとめに関する研究, 第 18 回日本在宅ケア学会学術集会, 2014 年 3 月 15 日, 16 日, 東京

2. 大塚美樹, 野崎仁美, 宮尾和代, 岩原真知子, 佐々木由紀, 家族介護者から介護を受ける終末期がん患者の感情体験, 第 28 回日本がん看護学会学術集会, 2014 年 2 月 8 日, 9 日, 新潟

3. 大塚美樹, 雑賀倫子, 乳がん患者の家族への負担感と精神的健康との関連, 第 39 回日本看護研究学会学術集会, 2013.8.22-23, 秋田

4. 大塚美樹, 萩野浩, 外来通院がん患者の家族への負担感に影響を及ぼす要因, 第 17 回日本在宅ケア学会学術集会, 2013.3.9 10, 水戸

5. 大塚美樹, 壮年期および中年期の外来通院がん患者における QOL と PS(performance status) の関連, 第 27 回日本がん看護学会学術集会, 2013.2.16-17, 金沢

6. 大埜美樹，高齢がん患者の家族への負担感に影響を及ぼす関連要因の検討，第 26 回日本がん看護学会学術集会，2012.2.11-12，松江

7. 大埜美樹，渡部ひとみ，安部睦美，進行がん患者の家族への負担感の経時的変化と影響因子に関する研究，第 16 回日本緩和医療学会学術大会，2011.7.29-30，札幌

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大えき 美樹 (MIKI OEKI)

広島大学・大学院医歯薬保健学研究院・講師
研究者番号：70403392